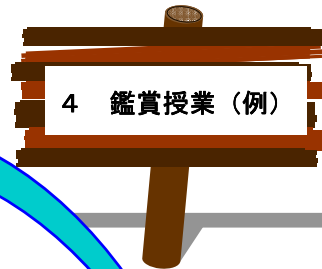
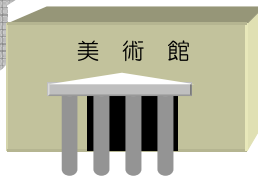


美術館と連携する場合には、学芸員任せではなく、どのようなねらいで授業をするのかを共通理解しましょう。



付けたい力(ねらい)

アーティスト、デザイナー、工芸家などの連携により、制作のプロセスを鑑賞する取組も考えられます。

子どもにとって、身近な作品は？親しみのある作品は？出合っている作品・学習した作品は？ など 子どもの実態をつかみましょう。

日常生活

他教科等

他教科の担当教員との連携により鑑賞の幅が広がることもあります。

授業形態(例)

- 鑑賞の授業として独立しない場合
  - ・ 表現の授業と合わせて行う。 など
  - ・ 日常生活の中での鑑賞の場を設定する。 など
- 鑑賞の授業として独立させる場合
  - ・ 美術館や校外の作品を鑑賞する。 など
  - ・ 本物や模写などにより校内で鑑賞をする。 など

本物を持ち込みたいが難しい…そんな時！

- ☆ 教師自身が本物を鑑賞する。
- ☆ テープなどで枠をつくり、本物の大きさを示す。
- ☆ プロジェクターで壁に実物大で投影する。
- ☆ 模写、映像などを用意する。(備品の充実、美術館の貸し出しの利用など)

鑑賞

いろいろな方法が考えられますが、感じたことを、色、光、形などの要素やイメージにたちもどって、子どもたちが捉えるようにすることが大切です。

いつ、何を、どこに、どのように、なぜを子どもたちのものに！

子どもが主体的に考えることができるようにしたいものです。知識を教えこむのではなく、作品から感じ取る、読み取る鑑賞の力を育みましょう。  
例「朝・昼・夕・夜のいつだろう、なぜそう感じるのだろうか？」「季節はいつだろう、なぜそう感じるのだろうか？」「どんな気持ちで表現したのだろうか、なぜそう感じるのだろうか？」「他の作品と見比べるとどのような違いがあるだろうか？」「どんな技法が使われているのだろうか？他の技法だったらどうだろうか？」 など

方法(例) …作品

- ☆ 作品に吹き出しを入れる。例「作品にインタビューをしてみよう。」「作品から言葉をひろおう。」
- ☆ 作品と同じポーズをする。作品から受けた感じを身体表現する。
- ☆ 作品の一部を隠し、何がどのように表現されているかを考える。白黒にして、色相や明度を考える。
- ☆ カレンダーの月ごとに似合う作品を選ぶ。例「この作者のこの作品は、何月が似合うかな。」「暖かく感じるもの、冷たく感じるものは？それはなぜかな。」
- ☆ 曲や音、料理や味などに例えてみる。例「どんな音が、どこから、どんなふうに関えてくるかな。」
- ☆ 作品のタイトルを考えてみる。例「作品のストーリーを考えてみよう。」
- ☆ 細部をじっくりみる。例「かたつわりになって絵をみてみよう。」「(川の描かれた絵) 笹舟に乗って絵の中を旅してみよう。」「パズルにしてみよう。」「作品の不思議なところを探してみよう。」「修復前と修復後を見比べてみよう。」
- ☆ 作品のおすすめポイントを紹介する。例「(立体作品) おすすめの見る位置を紹介しよう。」 など

方法(例) …作品群

- ☆ 作品群を並びかえたり、仲間分けをしたりしてその根拠を話し合う。例「家に飾りたい作品、学校に飾りたい作品、同じ表現ができるようになりたい作品、手に入れたい作品とその理由など」「似た作品をつなげていこう。」
- ☆ 用紙の上に絵葉書の作品を配置して美術館をつくる。美術館のジオラマをつかって作品を配置する。 など

付けたい力(ねらい)

表現

〔共通事項〕

- ☆ 模写する。作品の一部を隠して描く。例「○○(作者) 風に表現してみよう。」
- ☆ 構図、技法、表現意図などを表現に取り入れる。 など

鑑賞で付けた力と表現で付けた力との関わりを〔共通事項〕との視点から、見取っていきましょう。

活動をさせただけで、ねらいを見失っていないか、方法などがねらいにすりかわってしまっていないかについて、考えましょう。

手触り、温度、におい、音、味など様々な感覚を使って感じる力。色、光、形などから捉えたり、鑑賞する力を、表現とリンクさせたりする力。触覚体験、視覚体験を言語にする力。図画工作・美術科ならではの幅広い言語も育みましょう。